各小学校の取り組み

北海道

雄武町立共栄小学校（おうむちょうりつ きょうえいしょうがっこう）……9
湧別町立芭露小学校（ゆうべつちょうりつ ばろうしょうがっこう）……12
札幌市立幌南小学校（さっぽろしりつ こうなんしょうがっこう）……15
札幌市立駒岡小学校（さっぽろしりつ こまおかしょうがっこう）……18
札幌市立藤の沢小学校（さっぽろしりつ ふじのさわしょうがっこう）……21
札幌市立定山渓小学校（さっぽろしりつ じょうざんけいしょうがっこう）……24
千歳市立泉沢小学校（ちとせしりつ いずみさわしょうがっこう）……27
新得町立富村牛小学校（しんとくちょうりつ とむらうししょうがっこう）……30
標茶町立中茶安別小学校（しべちゃちょうりつ なかちゃんべつしょうがっこう）……33

宮城県

石巻市立北上小学校（いしのまきしりつ きたかみしょうがっこう）……36
仙台市立泉松陵小学校（せんだいしりつ いずみしょうりょうしょうがっこう）……39

福井県

あわら市波松小学校（し なみまつしょうがっこう）……42

東京都

多摩市立豊ヶ丘小学校（たましりつ とよがおかしょうがっこう）……45

愛知県

岡崎市立生平小学校（おかざきしりつ おいだいらしょうがっこう）……48

岡山県

西粟倉村立西粟倉小学校（にしあわくらそんりつ にしあわくらしょうがっこう）……51

森林体験活動発表の講評……55

北海道
雄武町立（おうむちょうりつ）
共栄小学校（きょうえいしょうがっこう）

6年 尾田叡郁　4年 田川勇樹　3年 石井優輝

地域と守る森と海
～小さな小学校の挑戦！

学校紹介

共栄小学校は、北海道の道東に位置しオホーツク海に面した漁業と酪農が盛んな雄武町にあります。学校の周りは酪農を営む農家が多く、グラウンドの横には牛が放牧されています。全校児童は5名で、今年で開校102年を迎えます。児童数が少ないことから、休み時間や放課後の遊び、さまざまな学校行事にも全校児童みんなで取り組んでいます。一輪車の活動に力を入れ、学芸会や町民文化祭で演技を披露したり、競技大会にも参加しています。学習や行事などでは地域との結びつきがとても強く、いつも温かく見守られながら過ごしています。

活動場所

本校の近くには「雄武川」という川が流れています。この川の上流には、北海道から認定を受けている「北の魚つきの森」があります。そこで、地域の人や漁師さんと一緒に植樹活動を行っています。また、川を少し下った鮭や鱒などが産卵にやってくる場所では、川の環境調査やカラフトマスの稚魚の放流を行いました。さらに下流では、漁師さんが鮭や鱒を網で捕る様子を見学に行き森・川・海のつながりを学習しています。学校の林は、パン焼き、木登り、ダンボールハウスなど、子ども達が考えた遊びを実践する場になっています。

サミットに参加してみて・・・

今後の夢・希望・活動計画

ふるさとの自然を愛する気持ちから、本校の児童一人一人に知恵と工夫で環境を守り大切にしていこうとする態度を育てるためにも、これまで取り組んできた植樹運動や川の環境調査などを継続していきたい。また、学校の林「アコイ林」をもっと子ども達が身近に感じ、四季を通してみんなが楽しめる林にできるように、児童と共に創意工夫を重ねながらつくり上げていきたい。

さらに、子どもサミットで学んだ、全国の多様な活動を参考にしながら、少しずつ自分たちの活動の幅を広げていきたい。

「地域と守る森と海～小さな小学校の挑戦！」

北海道雄武町立共栄小学校
発表者：尾田叡郁（６年）・田川勇樹（４年）・石井優輝（３年）

（１）　共栄小学校の紹介

・共栄小学校は、北海道の道東に位置しオホーツク海に面した漁業と酪農の町です。

・全校児童５名の小規模校。複式３学級の学校。
・休み時間や放課後は全校児童で遊んでいます。
・町民文化祭で一輪車の演技を披露。
・昨年は北海道代表で子ども国会に参加。
・お年寄りとの交流会で一緒にお料理に挑戦。
・雄武町～斜里町まで（２１２ｋｍ）を自転車で走る「オホーツクサイクリング」に毎年参加。

雄武町は毛ガニで有名

冬には流氷がやってくる

（２）　ぼくたちの挑戦！

①漁師さんと一緒に植樹

今年度は５～６月にかけて２回の植樹活動に参加し苗木を植えていきました。漁師さんから海の環境を守るために植樹活動を続けていくことの大切さについて直接話を伺うことができました。

②木の苗を育てている農家を訪問

植樹のための木の苗はどのようにして育てられているのか知りたいと、近くにある種苗農家に出かけていきました。苗木の育て方の話を伺った後、１年目の苗木の雑草とりなどの体験もしました。

③川の環境や生き物調べ

昨年の秋に川の環境調査を行いました。サケやマスの産卵状況やどのような水生生物がいるかを観察し環境が変化していないかを調べました。森から染み出てきた栄養がたくさんの生物を育てているという話も伺いました。

④「自然の大きな循環」を学習

植樹、種苗農家訪問、川の生き物調べなどの活動を振り返りながら、森から川を伝って流れ込んだ栄養豊かな水や落ち葉、水生昆虫などが海の生き物を豊にしていることを通して、自然の大きな循環について学習しました。

（３）　学校林で遊ぶ

ぼくたちの学校には小さな学校林があります。みんなで「アコイ林」と名付けました。アコイ林には、「あそんでこころがいやされる林」という意味があります。そこで、いろんな遊びを体験しました。

ダンボールの家

野焼きパン

看　板

木登り

雄武町立共栄小学校

1 実践の成果　実践の効果や子どもの成長、今後の期待など

・これまで、社会科の学習などで森林が人間の生活にとって大切なものであることは学んできている。しかし、「なぜ漁師さんが植樹をするのか。」「町が取り組んでいる『魚つきの森』への植樹とはいったい何なのだろうか。」という疑問があった。実際に植樹活動に参加してみて、初めて植林をする場所が川の近くであることに気付いたり、漁師さんとの植樹祭では、実際に植樹に対する漁師さんの考えや思いを聞くこともでき、植林活動、森を守る活動の大切さを実感することができた。さらに、自分たちの植えた木が海の環境を守ることにつながるという喜びを感じることができた。

・学校の敷地にあるいつも見慣れた林が自分たちの創意と工夫で遊べる林へと変身できるとういう体験から、児童が自分たちの活動に自信と喜びを得ることができた。また、これまでの経験を活用しながら自ら考え、自ら表現し、問題を解決していこうとする「確かな学力」への実践的経験ができた。

・多くの方にご協力を得ながら、森、川、海、そしてまた海から川、森へもどっていく循環型の環境教育を体験を交えながら学ぶことができた。

2 実践の課題　苦労したことや困ったことなど

・学校として、これまで継続して取り組んできた他の教育活動も多く、新たに森林環境教育の活動の時間を確保するために工夫が必要であった。

・裏山の森を活動場所にすることも考えたが、熊がでることやほとんど整備されていないとう実態があり、安全面を考え学校の敷地内にある林で活動を進めることにした。しかし、産卵時期はカラスが近くの林に巣を作り、威嚇してきたり、夏は藪蚊が多いことから、どうしても活動の時期が限られてきた。

・教職員が多数入れ替わることで、昨年から実践を経験していない先生方が多く、学習を進める上で共通認識をもって学習に取り組むのが大変であった。

3 課題への対応　工夫したことや課題の解決策など

・小学生の児童に言葉や映像だけの説明だけではなかなか理解できないことが多い。だからこそ、実際に体験し、そこで活動を続けている方の話を直接聞くということが、最高の教育方法であると考える。また、今回の取り組みに対しては、ただ体験させるだけではなく事前に「なぜ漁師さんは植樹をするのか？」「森はなぜ大切なのか？」などを考えさせたり、簡単に調べさせたりしてから体験的な学習に取り組んだ。また、さらに体験後に写真や映像を通して学習を深め、最後にまとめていくという流れで授業実践ができた。このことで、児童の理解力を高まり、体験活動した喜びも実感できていた。

・学習環境整った森林も良いが、今回のような身近な学校林を児童自ら試行錯誤し、楽しい遊び場へと変えていく活動の良さを感じた。実際に現場を見ることで課題を見付け、それをよりよく解決していくというプロセスを身に付ける機会となったからである。

4 その他　今後の計画や方向、抱負や希望など

・これまでの活動を整理し、学校の掲示板を活用して、森、川、海へと循環型の仕組みや植樹活動を通して環境を守ることの大切さを絵や写真などを使いながら児童と共にまとめていきたい。

・学校の林「アコイ林」をもっと子ども達が身近に感じ、四季を通してみんなが楽しめる林にできるように、児童と共に創意工夫をしながらつくり上げていきたい。

・これまでの活動（植樹や川の環境調査など）を継続的なものにしていくことで、本校の児童一人一人に知恵と工夫で環境を守り大切にしていこうとする態度を育てたい。そのためにも、次年度からは自分たちが植樹した木を育てる活動にも取り組んで行きたい。

北海道
湧別町立
芭露小学校

6年 岩﨑明／岡沢彩花／東海林大貴／山口菜々子

遊々の森「やすらぎの森」の活動を通して

学校紹介

私たちの学校のある湧別町は、北海道の東北部、流氷の流れ着くオホーツク海沿岸の中央部に位置し、北海道で最大の湖サロマ湖を抱えた、人口約1万人の町です。

芭露小学校は、明治41年に始まり、児童数の減少に伴い周辺の5つの小学校と統合し現在に至っています。統合当時120名いた児童も減少し今では全校児童34名の小さな学校です。校庭の木には、特別天然記念物のオジロワシやオオワシが来ることがあります。また、全国学校ビオトープ・コンクールで銀賞をいただいた学校池があり、貴重な動植物に触れるよい自然環境にあります。

活動場所

遊々の森「やすらぎの森」は、湧別町計呂地国有林円山自然休養林・111林班内（105. 02ha）にあります。「やすらぎの森」は、2006年11月に網走西部森林管理署と学校が協定の調印式を交わしスタートしました。

毎年、森林管理署の方と町のボランティア（森の博士）の方に協力をいただき、森林の観察や散策・植樹などを7月に行っています。12月には冬季の活動として、低学年は身近な森林にあるツルや松ぼっくりなどを利用し、リースづくりをしています。高学年は隔年で本棚・巣箱作りなどの木工作品作りをしています。

サミットに参加してみて・・・

今後の夢・希望・活動計画

今回の子どもサミットに参加し、他校の様々な活動発表に触れて、大変刺激を受けました。植樹や木の手入れなどの活動を通して、さらに『緑を増やす活動』ができるとよいなと考えています。

現在は夏季の活動のみ「やすらぎの森」を利用していますが、春夏秋冬の季節ごとに森へ出かけ、木や動植物のことをもっと知る活動をしたいと考えています。冬にはスノーシューなどを履いて雪の上を散策したり、春・夏・秋・冬の樹木や植物の移り変わりが感じられる活動によって、児童の森林に関する興味・関心を伸ばしていきたい、と思い描いています。

遊々の森「やすらぎの森」の活動を通して

北海道　湧別町立芭露小学校
６年　岩﨑　明　岡沢　彩花
東海林大貴　山口菜々子

オホーツク海

冬には流氷が接岸
流氷の天使クリオネ
ホタテ・毛ガニ・タラバガニ・カレイ・ホッケ・オオワシ・オジロワシ

森林教室

湧き水は、冷たい。森は宝箱のよう。
桑の実は甘かったよ。クルマバソウで風車を作ったよ。

サロマ湖

日本で３番目に広い汽水湖
ホタテ・カキ・ホッカイシマエビ・ワカサギ・ウグイ・オジロワシ・サンゴ草・原生花園・２年前は丹頂が飛来

樹名板の設置

木を覚えるのは難しかったよ。花・実・葉・樹皮・冬芽に特徴があるよ。

「やすらぎの森」での活動

森の入口に看板を建てたよ。
みんなで記念写真！ﾀﾗﾊﾞｶﾞﾆｰ

樹高測定・幹の太さ測定

目測と違ったよ。木の体積が出たよ。太さでずい分違うもんだな

芭露川

学校の隣で、初夏はワカサギ・秋はカラフトマス・シロザケが自然産卵しているよ。河口にはサンゴ草が見られるよ。

リース・松ぼっくりリース作り・巣箱作り→巣箱の掃除

巣箱の取り付け

きれいなリースが作れました。
巣箱に鳥が入るといいな。

やすらぎの森

遊々の森はサロマ湖にちょっと突き出た半島の一部になっています。網走国定公園指定。
ヒグマ・エゾシカ・キタキツネ・オジロワシ・フクロウ

≪学校周辺・地域での活動＞

①季節ごとに地域のフィールドを歩いて
　動植物の観察と出会う活動
②マザーツリー（母樹）と
　ベビーツリー（稚樹）の発見
③隣のみその山や学校池の周辺に巣箱を掛ける
　→シジュウカラが巣立ちました
④ドングリの種子から苗作り

≪これから自分たちでできることは…≫

森や木のことをもっともっと知る活動

●春夏秋冬の季節ごとに森へ出かけ、遊んだり、木や動植物のことを知る。

緑を増やそうプロジェクト

●自分たちの手で集めた種子から木を育て、木を植え緑を増やしたい。
●植林する土地近くの種子を使って苗をつくる。

湧別町立芭露小学校

1 実践の成果　実践の効果や子どもの成長、今後の期待など

平成18年より、7月に「遊々の森」にて森林教室を開催。毎年3年生から6年生が参加している。

森林管理署の方とボランティア（森の博士）の方に協力をいただき、「樹高や幹の太さの測定」、「樹名板作成と取り付け」、「巣箱の掃除と取り付け」、「森林散策（湧き水、樹木、草花、森林の様子の説明、野鳥観察を含む）」を行っている。（1回に2～3項目選んで活動している。）

平成19年より、12月に身近な森林にあるツルや松ぼっくりなどを利用して、リースづくりをしている。

平成21年より、1～4年生がリース・松ぼっくりツリー作り、5・6年生は次年度に取り付ける巣箱や本棚を自分の手で作成している。

遊々の森での活動は、自然への気づきや身近な円山の森林が周囲の自然にどのように機能しているのかを、子どもたちが体験しながら理解することができる。森での体験は毎回新しい発見を子どもたちにもたらす。様々な恵みや楽しさをくれる森は「宝箱のようだ」と子どもたちの感想を得ている。

また、冬の木工作品づくりでは、木のぬくもりを感じ、物づくりを楽しみながら、森林の役割や鳥と森林の関係、自然についての理解を深めている。

2 実践の課題　苦労したことや困ったことなど

夏の森林教室では、遊歩道の確保、ダニやハチ・クマ、ウルシの対策、活動中のトイレをどうするかについて課題となった。

また、各年だけの取り組みではなく、継続した活動になっていくような工夫が必要である。その際に、活動内容のサイクルを考え、3年から6年生になるまでに、つながりがあり、かつ、様々な活動が体験できるような計画を立てることが引き続きの課題である。

3 課題への対応　工夫したことや課題の解決策など

森林教室に向けて、森林管理署の方が下草刈りをし、遊歩道の確保・クマやウルシなどの心配がないかの下見をしてくださっている。

ダニ・ハチ対策としては、森林内を歩く際の服装の指導、虫除けスプレーの持参など。トイレに関しては、当日に簡易トイレ（1人用テントのような形）の設置をしていただいている。

取り組み課題の対応については、森林教室の前に森林管理署の方との打ち合わせを行い、毎年行う活動と今年度特に行う活動を組み入れるなどの計画をしている。

例として、樹名板の作成は2年続けて行い、破損や老朽化などがあればその際に作り変える。巣箱作りと本棚作りは隔年で行うなどの活動の工夫をしている。

4 その他　今後の計画や方向、抱負や希望など

・フィールドへは、5・7・9月の3回程度足を運んで季節の変化を体験したい。

・森のしくみを学びたい。（倒木更新・日光獲得競争・土壌形成と土壌動物・保水能力（針葉樹と広葉樹）・母樹と稚樹・森のサイクル・木の寿命・生物多様性と遺伝子資源の問題など）

・緑を増やす取り組みを身近にしていきたい。

北海道
札幌市立
幌南小学校

6年 星野謙／妹尾楓音

「幌南の森」で大発見！ カミネッコンから始める森づくり

学校紹介

幌南小学校は昭和11年の開校以来、隔年で研究大会を開催し、「学びも心も体もたくましく」を合言葉に教育活動に取り組んでいます。子どもたちは遊ぶことが大好きで、休み時間は1つのゴールをいくつもの集団が共同で使ってサッカーをしたり、竹馬やなわとび、ボール投げなどをしたりして元気に動き回っています。

また、校木の「神樹」にちなんだ異年齢集団活動の「子しんじゅ活動」では、週に一度の遊びや綱引き大会、遠足、花の鉢植えなどのイベントがあり、1年を通して仲を深めています。本校は住宅街に位置するため、自然環境に関わる学習に難しさがありますが、環境保全に関わるボランティアの方々にたくさんのご協力をいただきながら、環境に関する総合的な学習を進めています。

活動場所

幌南小学校は都市型の学校ではありますが、藻岩山頂上付近にある「幌南の森」という本物の森を活用できる札幌でも数少ない環境に恵まれた学校とも言えます。藻岩山の北斜面には多くの種類の樹木があり、国の天然記念物に指定されています。幌南の森はその南側にあり、石狩森林管理署やボランティアの方々が道を切り開き、子どもたちが自然学習できるように環境を整備してくださいました。3年生以上の子どもたちは、年に1度ここを訪れて、日常とは違う新鮮な空気を吸い、森の息づかいを感じながら活動しています。森での体験を自分の学習テーマに結びつけて調査し、表現活動を通して環境保全について追究しています。

サミットに参加してみて・・・

今後の夢・希望・活動計画

本校では幌南の森への交通手段として、市電とロープウェーを利用する必要があり、環境を時間的に生かし切れていない面があります。弁当を持参しての1日日程の活動や以前に行った親子体験会等、たっぷり森に浸れるような活動を検討中です。さらに、間伐材での物作り、基地作り、遊歩道作りなどの製作活動やツリークライミング、自然材でのアスレチックなどの自然を生かした活動、植樹林の測定等、他校の実践を参考にして取組を充実させたいと考えています。

「学校林・遊々の森」全国子どもサミット

札幌市立幌南小学校

1　活動テーマ
「幌南の森」で大発見！～カミネッコンから始める森づくり
2　学校名　　北海道札幌市立幌南小学校
3　発表者　　６年　星野　謙、妹尾　楓音
4　学校の紹介

幌南小学校は札幌の中心部の南に位置しています。学校の周りはマンションが多い住宅街です。学校の東側には豊平川が流れ、西側には市電が走っています。近くに自然は少ないですが、学校の庭にはビオトープという滝が流れる池があります。毎年春にはカモが遊びに来ます。休み時間には虫を探したり、魚を観察したりできます。また、ビオトープにはいろいろな種類の木があり、近くの中島公園や幌南の森の木と比べる学習もしています。

5　活動フィールドの様子

幌南の森は、札幌のシンボル藻岩山（５３１ｍ）の８合目に位置しています。広さは約１１，８ha もある自然豊かな森です。平成１６年に大きな台風があり、藻岩山の木々もたくさん倒れてしまいました。藻岩山の森を復活させようと、森づくりに関わる人たちが植樹活動を学校にも広げました。植樹活動を始めた６年前から、幌南の森ができて毎年植樹しています。森には初め道がありませんでしたが、ボランティアの方々が草を刈って、小道をつくってくださいました。おかげで、樹木や草花の観察やいろいろな活動ができるようになりました。

6　活動の内容や様子

＜１・２年生＞生活科で、中島公園やビオトープで観察したり木の実を集めたりして活動しています。集めた木の実で、ドングリゴマや迷路を作ったりして、フェスティバルを開いて友達との活動を広げています。
３年生以上は、総合的な学習の時間の環境学習として取り組んでいます。

＜３年生＞「まちのみどり探検隊」　中島公園でハルニレの種を集めて育てます。苗木になるよう大きく育てて、５年生になったら幌南の森に植樹に行きます。
＜４年生＞「幌南の森の魅力発信」　幌南の森を歩きながら樹木や草花を観察します。事前に作った「樹名板」には樹木の説明を書いてあり、遊歩道に立てて登山者に読んでもらいます。

＜５年生＞「命を守る幌南の森」　カミネッコン（再生紙ダンボール製の苗木を入れるポット）を親子でつくる活動をします。学校である程度育ててから幌南の森に植樹します。
＜６年生＞「森から私たちの生活を見てみると」　森や自然に対する自分たちの願いを書いた巣箱を樹木に取り付けます。環境問題のテーマを見付けて、調べる学習をして発表します。

7　活動を通じて学んだことや気がついたこと
どの活動もたくさんのボランティアの方々が指導してくださり、たくさんのことを学びました。森のはたらきや森を人が守っていることを知りました。幌南の森は空気がきれいです。生き物もたくさんすんでいます。生き物が快適に暮らせるように、森を増やす活動をしていきたいです。

札幌市立幌南小学校

1 実践の成果　実践の効果や子どもの成長、今後の期待など

本校は都心部にあるため手つかずの自然が少ない。自然に触れる機会の少ない本校の子どもたちが、本物の森をもっているという贅沢さを感じてほしいと思う。いざ幌南の森に入ると空気が澄み、夏でもひんやりしている。鳥のさえずりが聞こえる別世界の空間である。また、市内を見渡す絶景ポイントもある。子どもたちはボランティアの方々の説明に耳を傾け、植物を手にとって感じたり樹木を見上げたりする。植樹の際は、先輩たちが植えた数メートルに育ったカミネッコンを目の当たりしにて、木々がたくましく成長する力を感じ、自分たちが土をかけたばかりの苗木の未来を思い描く。

活動の成果は、子ども自身が自然の力や働きを実感できること、実感したことをきっかけにして環境に関するテーマを見付け探求していくこと、森づくりに関わる方々から教わることで環境保全への姿勢を学ぶことなどである。「自然を大切に」という一般的によく使われる言葉を、幌南の森での体験を経験として積み上げて深く理解し実践してほしいと願っている。

2 実践の課題　苦労したことや困ったことなど

・幌南の森へ行くには、電車とロープウェーの交通手段が必要となる。ロープウェーは通常10時30分からの営業だが、9時30から運行していただいている。交通費と移動時間に関わる活動の保障が課題である。
・幌南の森に関わる学習は本校の環境教育の中核をなし、総合的な学習の時間のカリキュラムに位置付いている。関係ボランティア団体と学校担当者が年度当初に打合せをし、活動に対する学年からの要望や日程を調整している。
・たくさんのボランティアの方々にお世話になり、子どもにとっては貴重な体験活動となっているが、限られた時間の中で行う幌南の森での活動が日常に十分に生かされていない面がある。また、藻岩山にクマが出没したことで活動が中止になったことが昨年と一昨年にあった。

3 課題への対応　工夫したことや課題の解決策など

・移動手段については、石狩森林管理署や関係機関に要請してご協力いただいている。遊歩道が拡張されているので、行動範囲を広げることが可能となる。活動時間も延長して弁当持参で午後も活動することを検討していく。その際、熱中症や虫への対策を強化する。
・学校担当者がボランティアと学年をつなぐ役割を果たしているが、両者の思いがマッチするように連絡・調整を図っている。幌南の森での活動の可能性について考え、教員自身が研修の機会をもち理解を深めて学習活動の改善を図る必要がある。
・幌南の森での活動は、自然愛や生命尊重につながる学習内容である。単元のみならず他教科や道徳などでも自然を守る価値に触れられるようにしたい。
・クマ出没や悪天候により活動が中止の場合は、ボランティアの方にスライドを使った授業をお願いし、自然の仕組みについての理解を深めた。

4 その他　今後の計画や方向、抱負や希望など

今後も関係機関と連携しながら、自然や環境保全に携わる人々への関心を高めて「自然を守るのは一人一人から」という当事者意識と実践力を身に付けられるようにしたい。

北海道
札幌市立
駒岡小学校

6年 大橋輪／初川優宇

駒岡の魅力を伝えよう！

学校紹介

駒岡小学校は、札幌市の南区にある小規模特認校です。全校児童86人中、77人がバス通学をしています。学校の前には川活動ができる精進川、学校裏には「こまおかの森」と言われる学校林がある自然溢れた学校です。駒岡小学校には誰もが楽しみにしている全校宿泊が2回あります。夏は川活動やキャンプファイヤー、五右衛門風呂、冬は歩くスキーやもちつき大会、尻滑りなどを全校児童、保護者、地域の皆さんと一緒に楽しく活動しています。

活動場所

学校の裏にある約1ヘクタールの「こまおかの森」(学校林)が活動場所です。春には柴刈りや自分の木の選定、シイタケの植菌、夏には下草刈りや樹木博士講習会をします。秋には植樹や木登り体験、ネーチャーゲーム、冬には巣箱はずしや巣箱かけ、スノーシューを履いて冬の森を観察します。また、週に1回は1週約800メートルのコースを約20分間走る学校林走も行います。生活科では葉っぱや木の実を使った遊びの活動、総合的な学習では学校林を題材とした調べ学習を実践しています。

サミットに参加してみて・・・
今後の夢・希望・活動計画

駒岡小学校では、生活科・総合的な学習以外でも学校林を教科学習に活用しています。例えば、国語では学校林を使った俳句作り、算数では比を使って自分の木の高さを求めたり、歩測を使って学校林走のコースを測ったりしました。音楽では学校林をイメージした曲作りなども実践しました。「学校林」を中心にした教材化にする「駒岡の森プログラム」を現在、作成中です。今後も自然豊かな駒岡小学校で豊かな人間性と生きる力を育んでいきます。

「学校林・遊々の森」全国子どもサミット in 北海道

「駒岡の魅力を伝えよう！」

北海道札幌市立　駒岡小学校
６年　大橋　輪　　初川　優宇

【学校紹介】

駒岡小学校には、開校以来約６０年間、子どもたちの学びの場として使われてきた約１ヘクタール学校林があり、平成２０年にはエゾリスや野鳥が休める場、子どもたちが観察できる場として、屋上にビオトープを設置しました。また、学校前を流れる精進川に気軽に入れるようにと、平成２１年には、親水施設も設置され、子どもたちは、木々や草花、虫や野鳥、水中の生物など、豊かな自然と触れ合いながら活動しています。

【活動場所の紹介】

学校林には、１周約８００メートルのクロスカントリー走のコースがあり、毎週木曜日の「こまおかタイム」の時間に林間コースを走っています。また、児童全員が自分のマイツリーを持っていて、６年間を通して、観察したり、いろいろな学習に役立てたりしています。野鳥が多く生息し、巣箱を設置して野鳥の巣作りの手助けもしています。

駒岡の秘密を探ろう！

✤１・２年生の生活科、３年生以上の総合的な学習で学校林をテーマに様々な活動をしています。５・６年生はその集大成として、駒岡の秘密を探してみました。

【大橋　輪】

学校林で最も数が多いミズナラの特長や、美味しく食べられるクリの調理法を探ってみました。たくさんの新しいことを知ることができ、学校林の良さをまた一つ見つけることができました。

【初川　優宇】

私は夏に数種類のキノコを調べました。いつから生え始めるのか疑問に思ったからです。秋には紅葉のことを調べました。例年より紅葉が遅い気がしたからです。気温の違いで変わることが分かりました。

✤私たちの学校林には、まだまだたくさんの秘密が隠されています。
６年間学校林で学習したことで、鳥や草の名前がすぐに言えるようになったり、家族と山登りをしたときなどでもその植物について説明したりできるようになりました。

こんな活動もしているよ！

クロスカントリー走
ツリークライミング
子ども樹木博士認定会
植樹活動
巣箱かけ
全校宿泊学習
歩くスキー

札幌市立駒岡小学校

1 実践の成果　実践の効果や子どもの成長、今後の期待など

◆**学校林の教材化**：生活科・総合学習のみならず、各教科で学校林を扱った学習を実践している。木の高さを比で求めたり、気温の変化を学校林内とグラウンドで比較したり、学校林の自然の音を楽器で表現するなど、子どもがよく知っている場所を学習で扱うので、意欲化や深化が図られる。

◆**学校林での自然遊び**：異学年の縦割り班で実施：生き物観察や森遊びを自分たち（上学年がリードして企画立案する）で計画して実行する活動を通して責任感や自立・協力する心が培われる。

◆**愛鳥活動**：異学年の縦割り班で実施：野鳥観察や巣箱観察（親鳥の出入りを見る）、秋の巣箱かけの活動から命を中心に成長していく鳥と子ども自身を重ね合わせ互いの成長を共感し合う。

◆**クロスカントリー走**：毎週木曜日　個人：春から秋：学校林内の1周800mのコースを走り。自分のペースで20分間に何周するかを計測する。子ども同士互いに声を掛け合って励ます。冬は歩くスキーで体を鍛えている。過酷で苦しい状態であるがやりきった汗と充実感を体感できる。

◆**自分の木選定、植樹・シイタケ植菌、樹木検定**：NPOの方々の協力：森林を親しむ心が培われる。

2 実践の課題　苦労したことや困ったことなど

◆学校林内（約1ha）を子どもが縦横無尽に移動するので、教職員数の不足による子どもの安全を確保するための管理体制にやや不安がある。

◆学校林を学習で扱う場合：動植物の正式名や自然現象の起きる理屈をどのように説明するか専門的な知識が教師にはあまりなく苦労することがある。勤務している教師は、自然科学の専門的な知識をもちあわせているとは限らない。また、学習内容によっては、正式名を調べて扱うと良いのか、偽名（低学年：子どもが名づけた名前や間違ったままで扱うのか）でよいのか迷うことがある。

◆本校は、NPO（営林署OB）に森林体験学習の一部をお願いしている。外部の方々に学校のシステムなどを理解していただくことや事前の打ち合わせなど時間の確保などに苦慮することがある。

◆スズメバチ、ダニなど虫に刺されること、植物による草かぶれへの安全対策：ハチトラップの作成と設置、長そで長ズボン・軍手の着用や手ぬぐいを首に巻くなどの対策を取っている。昨年は、校区内でのヒグマ出没によって、学習活動を制限させられることもあった。

3 課題への対応　工夫したことや課題の解決策など

◆毎朝、始業前、職員によってコースを巡回して安心して学習ができるように安全の確認をしている。

◆NPO（営林署OB）の皆さんに学校林の保守管理をお願いし、伐採・植樹・樹木名・維持管理の方法など専門的な見地から助言をいただいている。

◆学校林内での学習では、担任教師の他に補助教師がつく。連絡体制として全員がトランシーバーを持参し、指導監視範囲を決めている。また、事前に緊急時における病院への搬送と保護者への連絡体制・引き取り体制を整え、万が一の事故への対応をシュミレーションしている。

◆NPOの皆さん以外にも、北海道庁林務課・林業試験場・札幌市みどりの推進課など関係団体と連携して子どもの学習を支え、専門的な見地から適切な助言をいただいている。

4 その他　今後の計画や方向、抱負や希望など

◆学校林再生事業として、NPOの皆さんに毎年、樹木を伐採してもらい日光が地面まで届くようにし、切った樹木はシイタケのほだ木に使っている。また、子どもによる植樹作業を地域と保護者とともに実施している。今後も学校・保護者・地域・関係団体が協力して学校林を保守していきたい。

◎人間にとって欠かすことのできない自然とのかかわり、人とのかかわりを学ぶ場が姿を消しつつある今、それを実現する場として本校が担う役割は大きいといえる。本校の恵まれた自然環境を学習に生かし、子どもが自分の身体と五感を総動員し、仲間とのふれあいを通して心と体を育む実践をこれからも続け、北海道のみならず日本中に発信していきたいと考えている。

北海道
札幌市立
藤の沢小学校

6年 高橋ひより　5年 吉野美桜

げんきの森

学校紹介

札幌の南区にある藤の沢小学校は、今年度、記念すべき開校100周年を迎えた。本校は、小高い丘の森に囲まれた場所に位置し、隣接する「小鳥の村」を舞台に春夏秋冬、季節を全身で感じながら活動している。学校の敷地内にはグリーン広場もあり、昆虫や野花などを観察することもすぐできる。また、グラウンドには全国的にも珍しく小鳥の碑がある。

活動場所

学校から徒歩5分にある「小鳥の村」で、子どもたちは、自然を通して6年間で多くのことを学び、自然との共生について考える機会となっている。森に入るとすぐシジュウカラやヤマガラのさえずりが聞こえ、アカゲラなどの木を突く音、ドラミングも一年中聞くことができる。森の入口から20分ぐらいで一周できる散策路には、愛鳥広場や六つが池などがあり、四季を通して、小鳥だけでなく、様々な樹木や野花を観察することができる。冬には、エゾリス、キタキツネ、ユキウサギ、エゾタヌキ、ヤチネズミ、エゾシカなど多くの動物の雪に足跡が残るアニマルトラックも見ることができ、ヒグマも生息する自然豊かな森である。

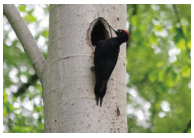
サミットに参加してみて・・・

今後の夢・希望・活動計画

今回、全国子どもサミットに参加し、各校それぞれ工夫された活動発表を聞き、大いに刺激となった。

今後とも、各学年が学年に応じた、新しい発見、驚きが生まれるような学びが深まる活動を積極的に続けていきたいと考える。そして、四季を通して、学校で作成した学習ミニ図鑑「藤の沢は自然がいっぱい」を持参し、五感を通しながら、目をこらして耳をすまして小鳥や草花の観察を継続していきたい。

また、「小鳥の村」での活動が、森遊びサポートセンターのスタッフの皆さんをはじめ、地域の方、そして多くの仲間と、人と人とをつなぐ「温かい活動」、「学びの場」として、これまでの伝統を継承・深化させていくものとなるよう努めていきたい。



「学校林・遊々の森」全国子どもサミット ｉｎ北海道

「げんきの森」

北海道札幌市立藤の沢小学校
６年　高橋 ひより　５年　吉野 美桜

＜学校紹介＞

藤の沢小学校は、札幌の南区にある各学年、１クラス、全校生徒１５３名の比較的小規模な学校です。今年で、開校１００周年を迎えます。
学校は、藤の沢小は高い丘の上にあり、森に囲まれています。私たちはその森の中にある「小鳥の村」で、春夏秋冬、季節を身体いっぱいに感じながら活動しています。また、学校の敷地内には、昆虫や野花などを観察することがすぐできるグリーン広場もあります。

＜活動場所の紹介＞

学校から歩いて５分にある「小鳥の村」では、その名の通り多くの野鳥を観察することができます。森に入るとすぐシジュウカラやヤマガラのさえずりが聞こえ、アカゲラなどの木を突く音、ドラミングも聞こえてきます。森の入口から２０分ぐらいで一周できる遊歩道には、愛鳥広場や六が池などがあります。四季を通して、小鳥だけでなく、色々な樹木や野花を観察することができます。冬には、雪の上にエゾリス、キタキツネ、ユキウサギ、エゾタヌキ、ヤチネズミ、エゾシカなど多くの動物の足跡が残るアニマルトラックも見ることができます。私たちは、６年間で多くの自然を学ぶことができ、自然との共生について考える良い機会となっています。

愛鳥愛人～自然の中で　目をこらして　耳をすまして～

１，２年生は生活科、３年生以上は総合的な学習で、「小鳥の村」をテーマに様々な活動をしています。全学年四季を通して、学校で作成した学習ミニ図鑑「藤の沢は自然がいっぱい」を持っていき、目をこらし、耳をすまして、小鳥や草花を観察しています。発見したものは、すぐそのミニ図鑑に日付を記入し、教室に戻ってから学習カードに気付いたことなど、絵を交えて書いています。学校行事としては、５月に愛鳥祭、７月には異学年でグループを編成し、チェックポイントごとにクイズに答えて進むオリエーテリング「小鳥の村大冒険」を行っています。
低学年は、秋に５年生が地ごしらえしたところにエゾヤマザクラなどの植樹活動をしています。また、２月になると体育のスキー学習の時間に歩くスキーで小鳥の村を探検しながら、雪に残った様々な動物の足跡を観察しています。
中学年は、冬に脂身やリンゴなど事前にえさを設置した小鳥の村の麓の小屋で小鳥を観察します。短時間で１０種類ぐらいの小鳥を観察することができます。
５年生は、「森遊びサポートセンター」のスタッフの皆さんの力を借りながら、７月には樹木博士認定会、１０月には地ごしらえ、ツリークライミングを行っています。６年生は、スノーシューで小鳥の村に入り、冬の樹木、冬芽を観察しながら、卒業記念として自分たちが作った巣箱を設置します。
このように、私たちは一年を通して自然の中に飛び込み、観察活動などを通して自然を愛し、友達や「森林遊びサポートセンター」の方々との関わりを通して、人の温かさを感じています。

札幌市立藤の沢小学校

1 実践の成果　実践の効果や子どもの成長、今後の期待など

◆これまで55年間行われてきた愛鳥祭をはじめ、四季を通して全学年が生活科・総合的な学習のみならず、体育（冬のスキー学習）や理科（動植物の観察など）の学習で実践している。

◆1年間の愛鳥活動や自然観察、初歩的な自然保護活動を通して、子どもたちは進級するとともに児童一人一人の取組の意識だけでなく、地域、郷土への愛着が高まってきた。

◆小鳥を、観察（視覚）によって覚えるだけでなく、鳴き声を聞くこと（聴覚）によって判別できるなど、五感を通して小鳥や植物と関わることができるようになってきた。

2 実践の課題　苦労したことや困ったことなど

◆自然がそばにあってもなかなか自ら働きかける子は、少なくなってきている。本校の今までの伝統を踏まえながら、子ども自ら働きかける自然保護の在り方とともに、自然への楽しみ方をもっともっと実践的に模索していく必要がある。

◆スズメバチ、ダニなど虫に刺されること、ヒグマの出没などによって、度々活動が制限されることがある。

3 課題への対応　工夫したことや課題の解決策など

◆一年を通して、「小鳥の村」の活動を本校の教育課程に位置付け、年度末には次年度に向けて各学年の課題などを教職員の中で引き継ぐようにしている。

◆NPO法人「森林遊びサポートセンター」の力をお借りし、「小鳥の村」の保守管理をはじめ、樹木博士認定会、地ごしらえ、植樹、ツリークライミングなど、子どもたちにとって楽しく、興味関心が高まる活動を行っている。

◆「小鳥の村」に生息する動植物の学習ミニ図鑑（カラー版冊子）を作成し、見つけたり気付いたことを記入できるようにしている。そのことによって、興味関心、意欲の持続を図っている。

◆「小鳥の村」に入る時の服装を徹底し（長袖、長ズボン、帽子、首にタオル、長ぐつ、軍手など）、虫（蚊、スズメバチ、ダニなど）に刺されたり、植物による草かぶれへの安全対策をとっている。また、ヒグマ対策として、クマ鈴やホイッスル、爆竹によって人の存在を知らせるようにしている。

4 その他　今後の計画や方向、抱負や希望など

春の愛鳥祭を始まりとして、四季折々の動植物・菌類の観察活動、巣箱、バードテーブルの設置と給餌活動を日常的に行っている。毎年、小鳥の村の数か所に5年生が愛鳥標語を掛けたり、6年生が卒業記念として巣箱を作成し、3月にスノーシューや歩くスキーで巣箱を設置したりすることが本校の伝統となっている。